



心理学におけるロゴスとレンマ：ギーゲリッヒ，山内得立，中沢新一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川原, 稔久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016929

心理学におけるロゴスとレンマ： ギーゲリッヒ，山内得立，中沢新一

川原 稔 久

1. ギーゲリッヒの思考における論理と身体

ギーゲリッヒは、その主著（2018）において、心理学を厳密に定義した。彼によれば、心理学Psychologyとは字義通り、魂Psychoの論理学logosであるべきであった。そして、魂の論理学の担い手が、考えるという論理的な運動であった。彼のその主著における論点は、章にしたがうと、六つあって、筆者（川原2019b）は彼の主著への書評において、その六つの論点を以下のようにまとめている。

①魂は語り得ぬ現象なので、魂の論理学（心理学）には、語り得ぬことを語るという二重否定の論理が必要である。

②心理学という魂の論理学には、内から突き上げてくる魂のインパクト、その魂のリアリティに根差して考えるという、違う次元に持ち上げる論理（止揚）が必要である。

③心理学という魂の論理学には、魂という無限の全体に根ざすために、有限と無限、部分と全体、内と外といった二項対立を乗り越えて考える、新しい水準の論理（弁証法）が必要である。

④心理学という魂の論理学は、魂とか精神といった無限の内面性についての学であって、外的な事象に対して独立した根拠となるがゆえに、外的な事象を対象とするすべての科学の源となる。

⑤認識された外的な事象すべては考えるという論理的運動によって成立するので、内面化するという論理的な運動のみが、外という現実に根ざすことができる。（その歴史的な例として、神話と錬金術が扱われた。）

⑥認識への衝動を止揚する論理としての心理学では、その衝動が解体され捨象されて視座のみが実現される。（心理学の厳密な定義の実現を示す物語として、アクタイオンとアルテミス神話が扱われた。）

これらの論点において、ギーゲリッヒ（2018）が魂の論理を導き出す際には、つねに身体が語られる。ギーゲリッヒが取り挙げる身体物語とは、たとえば、槍を投げること、感染症、心身症、猫と蛇、狩りをしに森に入ること、裸の女神に出会うこと、獲物

である鹿へ自らが変身すること、自ら連れていた猟犬にバラバラに食いちぎられること、などである。

そこで、筆者（川原 2019a）は、そこにはつねにすでに身体が働いていることを示した。つまり、ギーゲリッヒがまず論理の展開方法を語るにおいては、槍を投げてから歩んで辿り着くという物語における身体論理を基にしていた。また、世界の表層と深層という構造について語る際にも、脚を地から離さない猫の物語における身体論理が用いられていた。とりわけ、ギーゲリッヒが、視座のみが実現されるという心理学の厳密な定義を示した際に用いたのは、アクタイオンとアルテミスの神話という物語であって、その神話とは、身体がバラバラに解体され視座のみが残るといふ、死に伴う身体象捨（視座の抽象）の物語であった。

ここで、ギーゲリッヒは、身体物語を語ることによって身体論理を身体で生きていることになると思われるが、そのことで逆に、論理とはなにかについて、論理そのものを論じていないと思われる。たとえば、筆者（川原 2019b）が挙げたギーゲリッヒの論点では、語り得ぬ魂を語るという論理的な二重否定が可能なのが心理学である（①）。心理学による二重否定の論理が矛盾を止揚する弁証法であるから、心理学は、魂について、衝動を考えることであり（②）、無限と有限の両方を実現し（③）、外的な実際と内的な現実の両方を実現し得る（④、⑤）、と捉えることができる。そこでギーゲリッヒは、心理学が実現を目指す全体性とは、この弁証法という論理的ステータスであるとした。つまり、ここでギーゲリッヒは、衝動という身体を考えることは、衝動と思考という矛盾を止揚する弁証法という論理であると主張しているが、論理そのものを論じることなく、その代わりに身体物語によって身体論理に語らせていることになる訳である。

内から突き上げてくる魂のインパクトに根ざすということは、身体という衝動のリアリティを生きるということであり、身体を生きつつそれを考えるという営みの全体を実現するには、身体と思考の両方を射程に入れた論理が必要になるわけで、魂の論理を示すには身体物語によって語る必要があったのだと思われる。

2. 本論文の問題と目的と方法

ここで、ギーゲリッヒが身体のお話によって弁証法を語るとはどのようなことであろうか。言葉を変えるならば、身体が語るお話は、弁証法という論理にどのように関係するのであるか。つまり、本論文における問いは、論理と身体との関係がどのような関係にあるのか、という問題である。

そこで、本論文では、論理と身体との関係を考えるにあたって、まずは論理について検討することを目的としたい。そのため、以下では、心理学の知に関わる論理として、ロゴスということとレンマということを取り挙げる。まずは、ロゴスと対比してレンマということを取り挙げた山内得立の考え方を紹介し、次にそれらロゴスとレンマを包摂しようとレンマ学を構想した中沢新一の思想を紹介する。そのうえで、心理学における知の在り方の背景にある論理として、ロゴスとレンマを位置付ける考察を行う。

3. 山内得立のロゴスとレンマ

山内 (1974) は、西洋思想と東洋思想との対比のなかで東洋思想の独自性を見出す観点からロゴス *logos* とレンマ *lemma* を取り挙げた。ここで山内によれば、ロゴスとは拾い集めて言挙げて数え挙げることであり、レンマとはつかむことで直感的な把握のことである。

(1) ロゴスとテトラ・レンマ

存在と考えることとは同じであるという考え (パルメニデス、プロクルス) を出発してから、西洋の論理学はアリストテレスによる同一律・矛盾律・排中律を基本とする。同一律は、存在は存在であるという命題を出発点として、存在は同一でありそれ以外ではないという法則である。矛盾律は、運動が存在しなかつ存在しない矛盾ゆえに論理でない、という命題 (ゼノン) を出発点として、Aということと非Aということの両立 (矛盾) はありえないという否定である。そして排中律はAということと非Aということの中間はないという法則である。

それに対して、同一律はAという現象はあくまで人間が認識する枠組みや形式を前提とした同一律に過ぎないとして超越的な視点を打ち出したのがカントの哲学であり、矛盾律を止揚したのがヘーゲルの哲学であるとの位置づけから、第3の排中律を超えて、中を容認する (容中律) が東洋の論理の特徴であるとする。それを山内 (1974) はテトラ・レンマとして提示している。

テトラ・レンマは、1肯定、2否定、3肯定でもなく否定でもない (両否もしくは両非)、4肯定でもあり否定でもある (両是)、という四つの直感的把握の論理のことを言う。その淵源はインドの哲学に見出せるが、龍樹 (ナーガールジュナ) の「中論」において完成したと言う。山内は、1の肯定は同一律にあたり、2の否定が矛盾律にあたるとして、3の両否と4の両是が東洋の論理に固有であり、しかも3の両否があつて初めて4の両是が成立するとする。

AということはAであるというのが、1の肯定で同一律。Aということは非Aということと両立しない (非Aではない) というのが、2の否定で矛盾律。AということはAでもなく非Aでもないというのが、3の両否。Aということは (3の両否から) Aでもなく非AでもないことからAでもあり非Aでもあるというのが、4の両是である。この両否と両是が成立することが西洋の排中律を超えているとしている。

ここで、Aであることと非Aであることとの中間とはいかなる事態か、Aでもなく非Aでもないという両否とはいかなる事態か、Aでもあり非Aでもあるという両是とはいかなる事態か。これらの事態を生む論理は、排中律を超えた、中間を認めるあらゆる論理が必要となる。そこには、事象はつながりのあることで生じている、という縁起の考え方があつて、初めて中間を容認する論理が生じてくる。

(2) 縁起の構造と即の論理

山内は、テトラ・レンマの両否を基本として、ロゴスの関係とレンマの関係の違い、カテゴリーを前提とした因果論の否定、差異を否定した超越、存在と価値とを混同したアリストテレスの善の批判と価値から離れたインドの龍樹 (ナーガールジュナ) による「中観」、小乗仏教における修行実践の四種の諦観、中国における修行実践 (道) において展開したディ・レンマ (二項対立：為と不為、陰陽、有と無、善と悪) を詳細に論じている。そのなかで基本となるのが、縁起の構造と即の論理と思われる。

山内によれば、縁起とは、あらゆる可能性を潜在的に孕む空に即して、不生不滅という両否の論理として法が生じてくる繋がりであるが、山内の場合には因果関係や唯識論との比較吟味を通じて縁起が抽出されてくる点が特徴である。(ここで、縁起とは、あらゆる事象はつながりのあることで生じていることであり、あらゆる事象の全域を法界、そこに働く原理を法、あらゆる事象は生じるのでもなく滅するのでもないというのが不生不滅である。)

西洋思想における同一律と矛盾律は、存在についての論理であり、そこには差異があり、差異は対立となり、さらに矛盾となる。存在についての論理であればこそ、原因と結果という関係も因果として問題になるが、その関係はどこまで煎じ詰めても説明し切れることではない。

そうではなくて、出発点は、不生不滅という両否の論理としての法である。現象は法が生起した仮の現れであって、存在は仮の境界に仮にあつらえられた仮設である。存在という「もの」の次元ではなく現象という「こと」の次元は法の生起した事象であって、そのことを縁起とする。

そのことが端的に示されるのが即の論理である。即の論理は、その根底に肯定でもなく否定でもないというレンマの論理が横たわっていて、直接の直感の体験であって、体現された把握である。Aということは非Aということで基礎付けられていて、非Aということも非Aでないということで基礎付けられていて、その両否があるゆえに、両是がある。つまり、不生不滅の論理という法は何かを生み出す「マトリックス」(山内 1974: 309)である。存在でもなく非存在でもないというレンマの論理によって、存在でもあり非存在でもある世界が生じることになる。まずもって否定することで何かを生み出す論理を即の論理とした(山内 1974: 310)。

しかしながら、山内の論述は、出発点である不生不滅の両否の論理である、法についてはあまり明快ではない。インドと中国における法の論理の展開について詳細に論じるあまりに、思想の展開が明快とはならない。そこで、思想史として法の論理を整理して、そこにレンマの論理を根底として据えて見せたのが中沢(2019)によるレンマ学という思想である。

4. 中沢新一のレンマ学

中沢新一(2019)は、思想として、レンマの論理を根底に据えて、西洋と東洋の学を統一して収めるレンマ学を構想した。あらゆる生命の根底で働く知性をレンマ的知性として構想している。その発端は南方熊楠が粘菌の現象に大乘仏教が説く縁起の論理を見出したことである。脳という中枢も無く神経組織も無い多細胞の粘菌が環境に応じて動物のように効率良く栄養を摂取したり、植物のように生命を維持したりする(知性的)現象を観察した南方熊楠はそこに大乘仏教の華嚴経に説かれた縁起の法を看取することになる。

(1) 縁起の論理

ブッダの悟り(内自証、十二支縁起)の体験に縁起の論理を見出すのが大乘仏教であり、その中国における完成が華嚴経となる。中沢(2019: 36)によれば、ブッダによる縁起の論は、もともとは「ものごとはつながりのあることによって生じる」という意味から始まり、そこから大乘仏教が「すべての現象は相互依存の関係でなりたっている」という意味を引き出し、「すべての現象は縁起するゆえに、固定的な実体をもつものではなく、固執する対象もない」という意味に広がる。この縁起論は阿含経と般若経を経て、インドの龍樹による両否論(縁起論とは、滅なく生なく、断なく常なく、来なく去なく、異議にあらざ一義にあらざ)および両是論となり、中や空の論理が展開する(諸現象は自性も本体もなく空である=色即是空)。他方、北方大乘仏教は、法界は心(一心法界)と考え、諸現象は空から生じ空と一体である(空即是色)という唯識(アーラヤ識)論となった。この両者を統合し、ブッダの縁起の悟りを法界縁起に高めたのが中央アジアに生じた華嚴経である。

(2) 華嚴経の論理、レンマ的知性、アーラヤ識

存在の全域を法界とし、事と事の繋がりを縁起とすると、あらゆる事物が空を本体としているので、事物は空という共通の構造をもつ他の事物とつながることができる(相即)。お互いが繋がった事物は力が入れが生じて(相入)、一方が顕在となると他方が潜在となる。こうしてあらゆる事象が相互に映し合って運動している全体が法界縁起の世界で、中沢はそれをマトリックスとしている(中沢 2019: 73)。全ては分割されていつつ相互に嵌入していて、相互に何の差し障りも障害もない(無碍)状態にある。そうしたありようを心のありようとしても想定するのが、レンマ的知性である。他方、永遠の相にある真如心と時間が入り込んで変化の相にある生滅心の混合がアーラヤ識で、永遠の相にあるのがレンマ的知性で変化の相にあるのがロゴスの知性とされ、それらは顕在と潜在の関係にあってアーラヤ識はその混合とされる。

(3) 法界の四つのモード

この法界に四つのモードが以下のように想定される(中沢 2019: 113-125)。

事法界：現象の生起が絶え間なく行われている様相で、個々の事物は互いに差をもっている。

理法界：差のある事法一つ一つが平等で一如であることを認識させる理法が内在していて、これを理法界

の様相とする。レンマ的知性はこの理法界に対応する。それは、個々の事象は相互に縁起し、自性をもつことなく平等で一如であることをレンマ的知性が覚知する、法界の様相である。

理事無碍法界：事と理が相即相入して自在に行き来をしている様相である。ロゴスの知性の現象である言語やその象徴表現の能力のほか、生命現象に関する自然科学的な知見もこの相に属する事になる。

事事無碍法界：一心法界の本質は心性であり知性であるから、法界に生起するすべての事物は心性的知性的本質をもつというのが、大乘仏教の基本的考えなので、理を解かなくても、法界ではあらゆる事物がそのまま相即相入し自在な行き来を実現している。法界に生じるあらゆる事象と事物が、法界に充填している縁起＝レンマ的知性に相応した動きに従う様相。

このように構想されたレンマ的知性は、ブッダが悟りを体験して2週間の間に語られた内自証の心性に基づくので、あらゆる生命の根底にある知性として構想された。中沢はこのレンマ的知性とロゴスの知性の組み合わせによって無意識論、教論、言語論、芸術論に関する思想を展開している。

5. 心理学におけるロゴスとレンマ

これまで整理してきたように、レンマ的な知性を生命の根底に構想して、ロゴスとレンマを対立するものではなく、包摂し合う論理と捉えることができるならば、ギーゲリッヒが行った魂の衝迫を身体論で考えることが正当に位置付けられると思われる。

それは、魂の衝迫をレンマという直接の直感体験で捉えることである。というのも、ギーゲリッヒが指摘した語り得ない魂を語るというロゴスにおける二重否定は、レンマからいえば、両否の論理であるからである。両否の論理が生じる前提に、空に基づいた縁起の論理を構想するレンマ的な知性においては、魂の衝迫という事象は、事法界と理法界の混合した様相であろう。

言葉にし得ない魂の衝迫についての論理学は、魂についての論理学であり、ギーゲリッヒによれば、それが心理学であるが、身体という情動とそれを考えるという思考を必要としたがゆえに、ギーゲリッヒにおいては、ロゴスにおける弁証法という論理が説かれた。しかし、レンマ的知性から見れば、情動も理法と事法の混交である。そこに思考という理法が加わり、理事の双方において自在に無碍が実現されれば、身体物語は思考のロゴス論理としての弁証法を語るレンマ的論理を実現できよう。

また、魂は有限と無限の両方を同時に実現することからも、ギーゲリッヒにおいては、魂の生命はロゴスとしての弁証法論理であるとされた。しかし、レンマ的な知性からみれば、有限は事法界の特徴で、無限は理法界の特徴であろう。ここでも、理事双方の自在な交流が無碍として実現されるなら、身体有限な物語がレンマ的知性として魂の無限の層を語り得よう。

事と理の双方に自在に交通することが可能であるレンマ的知性においては、魂という事象を、外的で有限な実際と内的で永遠の現実との両方を同時に実現する事象として捉えることができるし、魂の学である心理学をロゴスとしての弁証法という論理的ステータスを実現することができる学として据え置くことも可能となる。そして、心理学の実現は、死という身体解体の物語によって、その視座のみが残る神話として語られるのである。

引用文献

- 川原稔久 (2019a). Giegerich, W.の思考における論理と身体. 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科心理臨床センター紀要, 12, 3-7.
- 川原稔久 (2019b). 書評. 「ギーゲリッヒ, W. (田中康裕訳 2018) 魂の論理的生命－心理学の厳密な概念に向けて. 創元社.」箱庭療法学研究32(1), 87-89.
- 中沢新一 (2019). レンマ学. 講談社.
- 山内得立 (1974). ロゴスとレンマ. 岩波書店.

参考文献

- ギーゲリッヒ, W. (田中康裕訳 2018). 魂の論理的生命－心理学の厳密な概念に向けて. 創元社.
- Giegerich, W. (2018). *Pitfalls in Comparing Buddhist and Western Psychology: A contribution to Psychology's Self-clarification*. The international Society of Psychology as the Discipline of Interiority Monograph Series, vol.2. USA.
- Maeda, T. and Sado, T. (2019). Beyond the logic of Lemma: the oneness of life and its environment, the oneness of within and without. *Journal of Analytical Psychology*, 64(2), 147-167.
- Nakazawa, S. (2017). A lemma science of mind: the potential of the Kegon (Flower Ornament) Sutra. *Journal of Analytical Psychology*, 62(1), 6-19.

(2020年2月3日受稿, 2020年2月17日受理)